

報 告

乳児期における育児参加と虐待予防に対する父親の意識

—核家族の父親への面接調査より—

頭 川 典 子

〔論文要旨〕

育児や子ども虐待問題に対する父親の意識を明らかにすることを目的に、核家族で乳児を持つ3人の父親を対象に面接調査を実施した。その結果、父親たちは育児への積極的な姿勢を持っている反面、仕事のために十分にかかわれていないという葛藤を抱えていること、妻に対して育児負担を軽減したいと思っていること、育児を学びたいという意識があることが明らかとなった。また、虐待予防の点からも妻のストレス軽減が必要だと考えていることがわかった。しかし、育児にかかわる社会資源活用についての意見はなかった。実家からの支援を受けにくい核家族世帯に対して社会資源の活用を意識づけていくことが虐待予防のためにも必要であると考えられた。

Key words : 父親の意識, 育児, 子ども虐待予防, 乳児期, 核家族

I. はじめに

育児における父親の役割は子どもの発達 측면から見ても重要である¹⁾。しかし、育児期の父親の就業時間は他の年齢階層と比較して最も長く²⁾、育児休暇取得率も0.5% (平成16年度)である。他の先進国と比較しても日本の父親の育児参加が十分に進んでいない。また、児童相談所に寄せられた虐待問題の主たる虐待者の割合では、実母が毎年1位となっている。このことは子育てにかかわる負担が母親に集中していることが一つの要因とも考えられている³⁾。育児不安に関する研究では、父親の育児協力や帰宅時間が母親の育児不安の低減に関連していることが明らかとなっている^{4,5)}。両親が協力して育児を行うことが可能となれば、親の育児負担が軽減され、虐待予防にもつながる可能性がある。しかし、わが国の実情をみると行政の育児支援事業は母親を対象としたものが多く、調

査研究においても母親を対象としたものが多い。周産期における父親の思いや親役割の発達に関する研究⁶⁻¹⁰⁾は散見されるが、子育てが始まった乳児期の子どもを持つ父親への育児に対する考え¹¹⁾や子ども虐待問題に対する考えについての実態調査は少ない。そこで、父親の視点から育児支援や虐待予防対策について検討することが必要であると考えた。

本研究では夫婦間の協力が不可欠であると考えられる核家族世帯を取り上げ、乳児期の子どもを持つ父親の育児や子ども虐待問題に対する意識を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査対象者

第1子が乳児期であった核家族世帯の父親3名とした。虐待はさまざまな要因が重なった時、どの家庭でも起こりうる問題とされているため、虐待のハイリスク要因と考えられている

Fathers' Awareness of Child-Rearing and Child-Abuse Prevention in Infancy

[1948]

Noriko ZUKAWA

受付 07. 7. 2

埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科 (研究職/保健師)

採用 07.12.11

別刷請求先: 頭川典子 埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科 〒343-8540 埼玉県越谷市三野宮820番地

Tel : 048-973-4128 Fax : 048-973-4751

貧困や妊娠先行婚といった背景がない一般家庭を対象とした。また、乳児期の子どもを持つ父親を対象とした理由として、家族内での新たな役割分担を模索している時期であること、母親のホルモンバランスの変化や授乳などの身体的負担が多い時期であり父親の協力が不可欠であること、乳児期の虐待は児の心身へのダメージが大きく、その後の親子関係にも影響を及ぼす可能性がある重要な時期であると考えたからである。

2. データ収集方法

半構成的面接法を用いて、「出産前の気持ち」、「出産時の気持ち」、「育児に対する父親としての思いや考え」、「子ども虐待問題に対する意見」などについて語ってもらった。面接内容は対象者の許可を得てミニディスクに録音した。

3. 調査期間

2006年8月～11月

4. 分析方法

面接内容を逐語録に起こし、意味のまとまり

ごとに区切りデータとした。データごとに内容を要約したコードを作成し、意味内容が類似するものをあつめてカテゴリー化した。

データ分析での信頼性・妥当性を高めるため、調査対象者3名に自分が語った内容と研究者が作成したコードやカテゴリーの表記にズレがないかを確認してもらった。メンバーチェックを行った。また、分析を進めるにあたっては虐待問題の専門家である大学教員1名からスーパーバイズを受けた。

5. 倫理的配慮

調査対象者へは研究の目的・方法・プライバシーの保護等について口頭と書面にて説明した。調査協力の同意が得られた人には同意書への署名を依頼した。本研究は所属大学の倫理委員会で承認を得て実施した。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の概要 (表1)

父親の平均年齢は31歳 (29～33歳)、職業は教育職1名、会社員1名、研究職1名であり、全員が大学卒業以上の学歴であった。「出産前

表1 対象者の概要

	Aさん	Bさん	Cさん
本人の年齢・仕事	30代・教員	20代・会社員	30代・研究員
「出産前の気持ち」	「名前などを考えるのが嬉しかった」 「妻のお腹が大きくなることで現実感が出てきた」 「病院で胎児の画像や大きさを教えてもらえるのが面白かった」	「自分の体を痛めないから、そんなに認識はなかった」 「お腹が大きくなるにつれて、子どもの物を準備するのが楽しかった」	「お互いに子どもが欲しかったので、単純に嬉しかった」 「(妻のつわりを見て) 将来、子どもや妻が病気になる時のことを想像して不安になった」
「出産時の気持ち」	「(立ち会いを予定していたが) 間に合わなかったので感動がなかった」 「寂しい感じ」	立会い出産 「とりあえず母子共に健康でお願いしていた」	立会い出産 (「出産の瞬間」感動して涙が出た)
育児参加の状況	子どもと遊ぶ (出勤前・帰宅後・休日) オムツ交換 入浴 離乳食を与える	子どもと遊ぶ (休日) オムツ交換 離乳食を与える	抱っこする オムツ交換 入浴 授乳
虐待問題に対する気持ち・意見	「よくわからない」 「理解できない部分もある」 「無力な子どもを殴ることは親の自己満足」	「リスクのある妊娠・結婚が多いから虐待を受ける子どもが出てくる」 「望まれていない出産では夫婦関係が不安定」	「自分は子どもが可愛いので虐待のニュースには親近感がない」 「虐待問題が認識されるようになったのは社会が発達したから」 「虐待は理不尽な問題」
父親が考える虐待の背景・要因	・親自身の生育歴の影響 ・家庭内の経済問題などのストレス	・親の精神的な未成熟さ ・父親の残業による母親任せの育児 ・家庭・地域での母親の孤立 ・夫婦仲の悪化・離婚	(該当なし)
妻の年齢・仕事	20代・教員 (育休中)	20代・専業主婦	20代・教員 (育休中)
子どもの月齢・性別	8か月・女兒	8か月・女兒	2か月・女兒

の気持ち」,「出産時の気持ち」を見ると,全員が妊娠を喜び,立会い出産を希望するなど,望まれた妊娠・出産であった。「育児の参加状況」を見るとオムツ交換や入浴などの日常の子どもの世話を行っており協力的な父親であると考えられた。同居家族以外の状況をみると,AさんとCさんの世帯は夫婦ともに実家他県,Bさん世帯は夫の実家は近所であるが妻の実家は他県であり,妻が気軽に実家を頼ることは難しい状況であった。

2. 父親の育児に対する姿勢と父親が求める育児支援策(表2)

82件のコードが抽出でき,28のサブカテゴリー,14のカテゴリーに分類できた。さらに現在の育児に対する姿勢,今後の育児に対する希望,父親が求める育児支援策に整理した。件数が多かった内容について,カテゴリーの大きさを【カテゴリー】,[サブカテゴリー]と表記して,説明を行う。

まず,現在の育児に対する姿勢について述べる。【妻との協働による育児への意欲】は10件あり,[妻の負担を軽減したい],[妻を大切に思う気持ち]という思いと,自分の育児が妻にとっては十分ではないかもしれないという[妻に対する申し訳なさ]で構成した。【育児への積極的な姿勢】10件は,オムツ交換などの世話に積極的にかかわっている[育児への積極的な参加],育児の中で日々発見があるなどの[子育ての喜び],子どもの世話を重ねることで[子育てへの自信]が出てきた気持ちを分類した。【子どもとのかかわりを大切にしたいという思い】は9件で,忙しい中でも子どもと[一緒に過ごす時間を確保したい]という意欲,[仕事で子どもと過ごす時間が短い]という現状を残念に思う気持ち,仕事のために子どもと接する時間は限られてしまうが[質の高いかかわりをしたい]という意欲を分類した。

一方,【育児に対する消極的な意識】6件も挙がっており,母親である妻にはかなわないという[妻と比較しての自信のなさ]について2名の父親が語っていた。また,父親Cは[育児をしていることが恥ずかしい]という世間に対する気持ちを語っており,父親Bは「自分が何

かをやっている時に子どもの世話を頼まれるのはいやな時もある」と[子育てが面倒くさい時もある]と述べていた。

次に今後の育児に対する希望について説明する。【今後果たしたい親の役割】8件,【どんな子どもに育てたいかの考え】8件については,それぞれが将来の自分の父親としての役割について考え,語られていた内容を分類した。【今後実践したい親としての態度】3件では,妻や子どもに対する[家族関係に暴力を用いない]2件と,[自分流の子育て]を分類した。また,【育児方針については模索中】3件では,「子育てはわからないことばかり」(父親A)といった現状に対する語りを分類した。

次に父親が求める育児支援策について述べる。父親Cからは【育児に関する情報交換】が11件語られており,父親として活用できる情報を求める声があがっていた。同時に,父親Cは【父親の意識改革】をあげており,自分が育児を頑張っていることは周囲に知られたくないと思っていることを踏まえ,父親自身が育児について語ったり,情報を求めたりする姿勢も必要ではないかと述べていた。父親A,Cからは【子育てを学べる場】4件,【職場の制度や意識改善】3件があがっていた。育児を事前に学んでおきたかったという思いと,父親の育児休暇制度取得の難しさや育児のために残業せずに帰ることで職場での評価が下がるという実態についての内容であった。

3. 父親が考える子ども虐待予防対策

子ども虐待問題に対する気持ちや考えについて対象者ごとに表1にまとめた。父親たちは「無力な子どもを殴ることは親の自己満足」(父親A),「虐待は理不尽な問題」(父親C)と,子ども虐待問題への憤りを感じていた。父親Bは「親の精神的な未成熟さ」が虐待の背景にあると考えており,リスクのある妊娠・結婚が多いことが虐待問題につながっていると考えていた。また,自分が残業続きで育児を妻に任せていることや,妻が他県出身者であることから,「母親任せの育児」,「家庭・地域での母親の孤立」も妻のストレスとなり,虐待につながるのではないかと心配し,状況を変えたいと語っていた。

表2 父親の育児に対する姿勢と父親が求める育児支援策

カテゴリー	サブカテゴリー	コードの例示	コード数
妻との協働による育児への意欲 (10件)	妻の負担を軽減したい	A：妻の負担が増えないよう子どもの世話を学習しておきたい B：子どもと遊ぶことで少しは妻の負担が減っているような気がする C：共働きの家庭では家事は分担することが必要	5
	妻に対する申し訳なさ	A：(自分が育児を) サポっているのかなと思い、日々申し訳なく思っている B：妻はもっとやって欲しいと思っているかもしれない	3
	妻を大切に思う気持ち	A：一番大切なのは妻で、娘は2番 B：妻とゆっくり話したり、それぞれの時間を持てることが子どもへの愛情につながる	2
育児への積極的な姿勢 (10件)	育児への積極的な参加	A：子どもの世話はやらないと覚ええない B：オムツを替えることには抵抗がない C：子育てに興味があったのでやってみたかった	5
	子育ての喜び	A：子どもとかかわる中で日々発見がある B：今までの生活ががらっと変わったが、苦ではなくむしろ楽しい	3
	子育てへの自信	A：子どもの世話は回数を重ねると慣れてくる C：子どもに接することで扱いに慣れ、子どもも泣かなくなる	2
現在の育児に対する姿勢	子どもとかかわりを大切にしたいという思い (9件)	A：一緒にいる時間の長さが子どもの安心感につながる B：もっと長い時間を子どもと接していたい C：長い時間は過ごせないが、なるべく子どもと過ごすことが大事	4
	仕事のため子どもと過ごす時間が短い現状	A：仕事でしばらく会わなくても勝手に成長している悲しい現実 A：もっと一緒にいられれば、もっと発見できるかもしれない C：仕事の時間が食い込みすぎて家族に申し訳ない	3
	質の高いかわりをしたい	A：子どもとかかわる時間が少なくても、質の高いかわりをしたい B：愛情を持って接していきたい	2
育児に対する消極的な意識 (6件)	妻と比較しての自信のなさ	A：男である父親には子育てが難しい部分がある A：失敗してはいけないと子どもの世話を逃けている部分がある C：母親が家でみるほうが子どもは幸せなので任せられない	3
	育児をしていることが恥ずかしい	C：子育てについて人に聞くことは恥ずかしい C：父親として子育てを積極的にやっていると恥ずかしい感じ	2
	子育てが面倒くさい時もある	B：自分が何かをやっている時に子どもの世話を頼まれるのはいやな時もある	1
父親としての責任感の芽生え (3件)	父親としての自覚	A：顔をみると笑ってくれるので親としての自覚が出てきた A：親としていい加減ではいけないと思った C：保育園を検討していたが、生まれてみると親が世話をしなくてはだめだと思った	3
育児への気負いのなさ (2件)	今までの日常の延長という感覚	B：「子どもが生まれたので頑張らなくて」という思いはない B：今までの生活に家族が一人増えたぐらいの感覚	2
	今後果たしたい親の役割 (8件)	B：子どもに理解させながら育てていきたい B：考えを教え込むのではなく、ヒントを与えるようにしていきたい	4
	子どもの人格形成にかかわる	A：子どもにどのように色をつけていくかが親の仕事 B：自分にないところを育ててあげたい	3
今後の育児に対する希望	環境を整える	A：子どもが安全に暮らせるように環境を整える	1
	どんな子どもに育てたいかの考え (8件)	A：集団生活を守る子どもに育てたい B：公共の場で迷惑をかけない子どもに育てたい B：人が見ていないところでも自分の行動に責任を持てることが重要	6
	健全な成長への願い	B：変なほうに進まなければいいなと思っている C：元気で明るく育て欲しい	2
今後実践したい親としての態度 (3件)	家族関係に暴力を用いない	A：親として子どもの前で喧嘩をしない B：力で抑えつけられていると、いつか子どもは爆発する	2
	自分流の子育て	C：親を参考にせず、自分の人生経験を基に子育てをする	1
	育児方針は模索中 (3件)	育児方針については、まだわからない	A：子育てはわからないことばかり B：まだはっきりとしたビジョンは持っていない
育児に関する情報交換 (11件)	父親向けの育児書・育児雑誌	C：父親向けの育児雑誌がほとんどない C：父親が利用できる子育ての教科書が必要	5
	父親が気軽に情報交換できる場	C：父親が情報交換できるコミュニティサイトがあるとよい C：匿名で子育て情報交換ができるとよい	3
	父親向けの育児情報	C：父親が参考にできるような子育ての情報源が少ない C：育児休暇の取得方法や保育園情報などは周囲の人に聞く	3
父親が求める育児支援策	子育てを学べる場 (4件)	A：インターンシップのように子どもとかかわれる機会が必要 C：出産前に子育てを勉強できる場が必要	4
	職場の制度や意識改善 (3件)	A：周囲の意識が古く父親が育児休暇を取りにくい状況がある C：早く帰ると職場での評価が下がり辛い思いをする人もいる	3
	父親の意識改革 (2件)	A：父親はなかなか子育ての情報を探しにいかない C：子育てを自慢する父親も出てきた	2
合計			82

父親から提案された子ども虐待予防対策を表3にまとめた。【親になる前の教育】、【社会全体での子ども虐待問題の知識・法律の整備】、【母親のストレス軽減】、【父親同士の交流の場づくり】、【労働環境の見直し】の5つのカテゴリーに分類できた。

3人の父親に共通だったのは【親になる前の教育】〔親になる前の教育・準備期間の必要性〕であり、両親が育児の大変さを事前に模擬体験し、知識を学んでおくことで、育児不安や虐待が予防できるのではないかという内容であった。

また、父親A、Bは【母親のストレス軽減】をあげており、いずれも父親が日中育児をしている母親のストレスを発散させてあげることが必要だと語っていた。

父親Bからは【親になる前の教育】〔望まない妊娠を防ぐ取り組み〕が重要との意見が語られていた。父親Cは【社会全体での子ども虐待問題の知識・法律の整備】に関する意見が出された。父親Aは【父親同士の子育ての情報交換】をあげており、父親同士も情報交換をすることで実際の育児に活かせ、親の育児負担感が減り、虐待予防にもつながるのではないかという意見であった。

IV. 考 察

前述の乳児期の子どもを持つ父親への面接調査から、3つの視点で考察を行った。

1. 育児と仕事との葛藤

結果の表2に示したように父親たちは【育児への積極的な姿勢】、【子どもとのかかわりを大切にしたいという思い】を持ち、【父親としての責任感の芽生え】を感じていた。また、父親たちは【仕事のため子どもと過ごす時間が短い】という現実を残念に思いながらも、【一緒に過ごす時間を確保したい】と願い、【子どもとのかかわりを大切にしたいという思い】を抱いていた。父親役割獲得や父子の愛着形成への援助に関する先行研究¹²⁻¹⁴⁾を見ても、看護職による父親への育児支援は必要であると考えられる。

また、父親の育児参加の割合は仕事時間と関係している。今回の調査結果からも父親たちは仕事のために子どもと長い時間を共に過ごせないと感じていた。父親Bは「企業が残業をなくさない限り、虐待につながる可能性がある」と語っており、妻への育児負担の集中も虐待の要因になる可能性があると訴えていた。また、父親の育児休暇取得や育児のために残業せず帰宅することに対して職場の理解が少ないと感じて

表3 父親が考える子ども虐待予防対策

カテゴリー	サブカテゴリー	コードの例示	コード数
親になる前の教育 (11件)	望まない妊娠を防ぐ取り組み	B: 望まない妊娠や出来ちゃった婚を予防しないと虐待は減らない B: 望まない妊娠をしないように育てるのは親の責任 B: 自分の意思で望まない妊娠を回避できるような子どもに育てたい	7
	親になる前の教育・準備期間の必要性	A: 子育ての現実を学ぶ模擬体験が必要 B: 出来ちゃった結婚の場合は心構えが乏しい状態で親になる C: 子育ての事前教育が行われることで育児不安の軽減や虐待予防に役立つかもしれない	4
社会全体での子ども虐待問題の知識・法律の整備 (4件)	子ども虐待の仕組み解明	C: 虐待をしてしまう仕組みの解明が必要 C: 虐待の定義が微妙なので、きちんと定義することが必要	2
	子ども虐待問題への法的規制	C: 強制捜査権を行使できるなどの法的整備が必要 C: 虐待は一律に国などの機関がすべて規制するべき	2
母親のストレス軽減 (2件)	主な養育者である母親の精神的負担の軽減	A: 子ども虐待の予防には妻のストレス発散が必要 B: 母親のストレスのはけ口に父親になってあげる必要がある	2
父親同士の交流の場づくり (1件)	父親同士の育児情報や交流の必要性	A: 父親同士が子育ての情報交換や愚痴を話せる場が必要	1
労働環境の見直し (1件)	父親の残業をなくす	B: 企業が残業をなくさない限り、虐待につながる可能性がある	1
合計			19

いることが明らかになった。ベネッセ次世代育成研究所が2005年に0～6歳児を持つ父親2,958名を対象に行った調査でも、54.7%の父親が子育てにかかわりたいが「時間がなく、妻任せタイプ」であり、他の「夫婦共同分担タイプ」27.3%、「仕事専念タイプ」17.7%と比べてもっとも多かった。また、父親が使いやすいと思う子育て支援策では「フレックスタイムや短時間就業」、「男性の育児休業制度の法制化」など勤務時間や育児休業制度の改善が求められており¹⁵⁾、本調査での父親たちの語りと一致していた。国をあげての父親の育児参加推進の取り組みが望まれる。

2. 母親の育児負担に関する父親の意識

3人の父親が【妻との協働による育児への意欲】を語っていた。また、2人の父親が【母親のストレス軽減】が虐待予防に必要なだと考えていた。今回の調査対象者は、妻へのいたわりの言葉を多く語っており、夫婦関係が良好である事例だと捉えることができた。母親の育児負担に関する先行研究をみると、第1子出産後1か月の母親は「自分への理解」を基盤として「日常生活の手助け」、「人とのつながり」などのソーシャル・サポートを求めていること¹⁶⁾や、産後4か月の初産婦への調査では「体を休めることができない」、「気持ちを休めることができない」などの項目で育児負担度が測定されていた¹⁷⁾。これらの研究結果からも乳児を育てている母親の育児負担軽減には父親の育児協力や妻へのいたわりが重要であると考えられる。

しかし、考察1でも述べたように現在の男性の働き方の実態は、父親が十分に育児参加できる状況とはいえない。本研究でも残業や出張などで十分に育児参加ができず〔妻に対する申し訳なさ〕が語られていたが、育児に関する社会資源活用についての意見は聞かれなかった。育児の負担を夫婦間のみで解決しようとすることは困難であり、地域における人とのつながりを基盤に、さまざまな社会資源を活用していくことが必要である。実家からの支援が得にくい核家族が、必要時に社会資源にアクセスできるよう、看護職が妊娠中の両親学級などの場で育児の大変さを伝え、社会資源（育児相談、有償ボ

ランティアなど）の活用を促していくことも有効なのではないかと考える。

3. 育児を学びたいという父親の意識

初めて子育てをしている父親は育児支援対策として【育児に関する情報交換】、【育児を学べる場】、虐待予防対策として【親になる前の教育】、【父親同士の交流の場づくり】を求めている。父親たちは子どもが生まれる前に心構えを持っておきたかったと語っており、調査時点でも育児に関して情報を交換したいと考えていた。

現在は核家族が増え、自分の子どもを持つまで赤ちゃんとしたことがない親が増えている。以前までは家庭や地域で伝承されていた育児の大変さや喜びが、現在では「学ぶ」ものになりつつあると言える。今回の結果にもあるように育児を学んでから子どもを迎え入れたいという親の思いは、母親のみでなく父親にとっても切実な声なのではないかと考えられた。

米国では父親が子どもの発達過程にかかわっていきけるよう支援する親業教育について研究が行われている¹⁸⁾。カナダのトロントでは子どもや大人を対象としたさまざまな育児不安や虐待予防の準備教育が実施されている¹⁹⁾。日本の小中学校で行われている赤ちゃんふれあい体験を活用し、継続的に赤ちゃんの成長を学ぶ機会を設けることで、育児の尊さを学び、将来的な虐待を予防していくことができるのではないだろうか。

また、父親は自分たちが利用しやすい育児雑誌や情報交換の場が少ないと感じ、これらの資源を求めている。父親Cのように情報は必要と感じているが「子育てを積極的にしていることが周囲にばれると恥ずかしい」と感じる男性もあり、父親のニーズに沿った情報提供方法を検討すると共に、父親の育児参加への社会の意識改革も必要であると考えられた。

4. 本研究の限界

今回の調査対象は3名と少なく、「父親が大学卒業以上の学歴」、「子どもが女兒」という偏りがあり、同時に育児や虐待問題への意識が高い父親であった。そのため調査結果の一般化は

できない。今後はさまざまな意識や背景を持つ父親への調査が必要である。

V. ま と め

乳児を持つ父親は子どもとのふれあいを通じて育児の責任や喜びを実感していた。また虐待予防のためには妻のストレス軽減が必要と考えていた。しかし、仕事のために十分に育児に参加できていないと感じている一方で、育児への社会資源活用についての意見はなかった。父親の育児参加に対する社会全体の理解を促進していくと共に、核家族世帯が社会資源を活用できるようにしていくことが虐待予防につながると考えられた。

謝 辞

本調査にご協力いただいた父親の皆様、ご指導を賜りました長野県看護大学の北山秋雄教授に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 加藤邦子, 石井クンツ昌子, 牧野カツコ, 他. 父親の育児にかかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響: 社会的背景の異なる2つのコホート比較から. 発達心理学研究 2006; 13 (1): 30-41.
- 2) 厚生労働省(2002). 平成13年版働く女性の実情. <<http://www.jil.go.jp/mm.siryo/20020329.html>>
- 3) 厚生労働省(2006). 平成17年度児童相談所における児童虐待相談対応件数等. <<http://wwwmhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv10/index.html>>
- 4) 北村愛子, 佐鹿孝子, 大久保ひろ美, 他. 父親の育児参加と母親の育児不安との関連 204組の夫婦のアンケート調査より. 山梨県立看護大学短期大学部紀要 2000; 5 (1): 61-76.
- 5) 安藤智子, 岩藤裕美, 荒牧美佐子, 他. 幼稚園児をもつ夫の帰宅時間と妻の育児不安の検討—子どもの数による比較—. 小児保健研究 2006; 65 (6): 771-779.
- 6) 奥住みつ子, 滑川恵子, 奥山真佐子, 他. 当院における父性意識の形成・発達過程に関する研究—新生児の父親の調査—. 母性衛生 2001; 42 (4): 686-692.
- 7) 光田咲子, 村上明美. 初めて子どもを持つ父親の育児観. 母性衛生 2002; 43 (1): 67-72.
- 8) 神崎光子. 妊娠後期における夫の親役割への適応に関する研究(第1報)—親としての態度・行動的变化と親意識, 妻との関係性, 子どもへの感情および自我状態との関連—. 母性衛生 2005; 45 (4): 540-550.
- 9) 佐々木くみ子. 親となることによる人格的発達に関する研究—第1子妊娠期の父母について—. 母性衛生 2005; 46 (1): 62-68.
- 10) 木越郁恵, 泊 祐子. 周産期における夫の父親役割獲得プロセス. 家族看護学研究 2006; 12 (1): 32-38.
- 11) Craig F. Garfield, Paul J. Chung. A Qualitative Study of Early Differences in Fathers' Expectations of Their Child Care Responsibilities. Ambulatory Pediatrics 2006; 6 (4): 215-220.
- 12) Kang NM. The literature review for the principles of nursing intervention for paternal role. Korean Nurse 1988; 27 (5): 78.
- 13) Goulet C, Bell L, St-Cyr D, Paul D, Lang A. A concept analysis of parent-infant attachment. Journal of Advanced Nursing, 1998; 28 (5): 1071-1081.
- 14) 岩田裕子, 森 恵美. 父親役割への適応を促す看護援助に関する文献検討. 千葉看護学会誌 2004; 10 (1): 49-55.
- 15) ベネッセ次世代育成研究所. 第1回乳幼児の父親についての調査報告書. 東京: ベネッセ次世代育成研究所, 2006.
- 16) 鶴山愛子, 久米美代子. 産後1ヶ月の母親が必要としているソーシャル・サポートの検討. 日本ウーマンズヘルス学会誌 2005; 4: 19-31.
- 17) 池田浩子. 育児負担感に関する研究 育児負担感の時期別変化と母親の心理状態との関連. 母性衛生 2001; 42 (4): 607-614.
- 18) Ann D Burbach, Robert A Fox, Bonnie C Nicholson. Challenging Behaviors in Young Children: The Father's Role. The Journal of Genetic Psychology 2004; 165 (2): 169-183.
- 19) 武田信子. 海外情報—育児不安を克服するための早期からのサポートを考える—「カナダ」. チャイルドヘルス 2004; 7 (2): 29-33.

[Summary]

The purpose of this study was to examine the fathers' awareness of child-rearing and child-abuse prevention. I conducted an interview survey with three fathers of infants raised in nuclear families.

The results were as follows : while they took a positive attitude toward child-rearing, 1) they faced a conflict between child-rearing and work. 2) They were concerned about their wives' burden in child-rearing. 3) They wanted to learn child-rearing. 4) They thought that, also from the perspec-

tive of child-abuse prevention, it was necessary to reduce their wives' stress. But they had no opinion about the use of social support for child-rearing. This indicates that there is a need to promote the use of social resources for child-rearing in nuclear families, for whom it may be difficult to get some supports from their parents.

[Key words]

father's awareness, child-rearing, child-abuse prevention, infancy, nuclear family